

恥ずかしい音

公衆トイレでの「音消し」という習慣に出会ったのは、20年以上前の高校生の頃。友人と一緒にトイレに行く、みな個室に入っすぐ水を流し、その後にもう一度流すので「なんで2回も流すんだろ」と不思議に思っていた。それが小用の音を消すためだと分かったときは「そんなことしなきゃいけないの？」と愕然としたが、その後は自分も同じようにやらないと恥ずかしい気がして、やるようになった。時は流れ、今やデパート、オフィスビル、そして駅のトイレにまでも、流水音を流す擬音装置がごく当たり前についている。水を流して「音消し」をする機会は格段に減ったので、節水面の効果は大きいだろうし、利用者サービスという面でも、設置する意義は確かにあるのだろう。

でも、今も心の奥底では、高校生の頃と同じことを思っている。本当に、そんなことしなきゃいけないの？

当たり前になってしまった今だからこそ、改めて問いたい。その音は、本当に恥ずかしい音ですか。

近代日本のトイレと「音消し」の歴史

まずは日本のトイレの変遷を簡単にさらっておく。江戸時代までは「汲み取り式」が主流だったが、明治時代に木製の洋式（腰かけ）便器が登場し、大正時代には、陶器製の水洗洋式便器が、日本陶器合

名会社によって開発される。これは現在、便器の販売で国内最大のシェアを占めるTOTO株式会社の前身である。

昭和に入ると、戦後の高度経済成長、東京オリンピックなどを主な契機に、トイレ事情も急速に変わっていく。暖房便座、節水型と徐々に進化し、1980（昭和55）年には温水洗浄便座「ウォシュレット」が発売されて大ヒット。ウォシュレットは現在、日本の家庭の8割に普及しているという。またウォシュレットをはじめとする日本のトイレのすばらしさを「クールジャパン戦略」の一環として世界に発信しようとする動きもあり、2015（平成27）年には成田空港にTOTOのギャラリーがオープンしている。

このTOTOが1988（昭和63）年に開発したのが、擬音装置の先駆けにしてもはや代名詞の「音姫」だ。同ウェブサイトによれば、「当時各地を悩ませた渇水」をきっかけに「高まる節水意識に応じて商品化」したという。

その後は他のメーカーの参入も相次ぎ、高機能化・多様化が進んだ。今、商業施設やオフィスのトイレに行くと、音符マークのついた擬音ボタンとともに、温水洗浄便座の「おしりを洗う」「ビデ」「脱臭」「流す」など様々なボタンがパネルに並んでいる。音もかつては「ジャー！」という無骨な流水音だけだったのが、小川のせせらぎ（？）のように自然な感じにフェードイン・フェードアウトしたり、小鳥のさえずり（！）が混じっていたり、より快適さを演出するようなものが目立つ。

江戸時代にもあった「音消し」

ところで私は、「音消し」というのは生活環境に
対する衛生・美的志向が高まった現代社会ならでは
の現象だと思っていた。しかし色々調べていく中
で、実は江戸時代にも、まさに擬音装置の役割をな
す「音消し壺」なるものがあつたと知って驚いた。
これは、底の部分に栓のついた壺で、水をためた状
態で栓を抜くことで流水音を出す、という仕組みの
ものだ。もっとも、これを使っていたのは身分の高
い女性に限られ、明治時代以降は姿を消していたよ
うなので、単純に現代の「音消し」と同一視はでき
ない。ましてや「日本人特有の恥じらい・奥ゆかし
さ」のような方向に話を持っていくつもりもない。
ただ、この「排泄音＝恥」の意識が、思っていた以
上に根深いのかもしれない、と考えさせられる事実
ではあつた。

「音消し」はマナー？

もう一つ、意外な発見があつた。

私は、「音消し」を単純に「自分が恥ずかしいか
らやる」行為と捉えていた。しかし、それだけでは
なく「他人を不快にさせないためにやる」行為、つ
まりマナーの一環だとする考え方もあることを知っ
た。

株式会社マイナビが運営する情報サイト「マイナ
ビウーマン」が2016年12月に22〜34歳の働く女
性を対象に行ったwebアンケート（有効回答数
106件）の結果を見ると、擬音装置があるのに使
わずに用を足す人に対し「音が丸聞こえで恥ずかし
くないのかと思う」「空気が読めない、気遣いのな

い人だと思う」「周りも気にしていないしマナーが悪
い人が多い」といった手厳しい意見が挙がっている。
もちろん「別に何とも思わない。（略）むしろ強制
するのはどうかと思う」「私も使わないけど気にす
ることはないと思います」といった意見もある。そ
れぞれの回答の割合は示されていないが、「自分も
使わない」という人は少数派であつたらしい。

この「音消し」をマナーとする考え方、個人的に
は意外だが、実際のところ、みんなはどう思ってい
るのだろう。気になったので、突発的にweb上で
アンケートを実施してみたところ、26名の方から回
答を得た（ありがとうございます）。

その結果は左ページにまとめたが、回答者の約8
割が女性で、女性は全ての方が「音消し」の経験が
あると答えた。問6で「音消し」に対する考えとし
て最も近いものを選んでもらったところ、「やるか
やらないかは個人の自由であり、マナーとして強要
されることではない」が約7割で最多となり、「マ
ナーとして、やるべきことである」はゼロであつた。
ただ、問7で「音消し」に対する考えを自由に記
述してもらったところ、「他人の用足し音を聞きた
いかと言われるとやはり聞かなくて良いなら聞きた
くないかも」「聞かれる」のは恥ずかしいですが、

『聞かされる』のはなぜかもっと恥ずかしいですが、
音消ししてくれないのかな」と困惑します」といっ
た意見もあつた。「音消し」は、マナーの一步手前の、
少々懐かしい表現だが「エチケット」とでもいうべ
き立ち位置にいるのかもしれない。

「恥ずかしさ」のすり込み

そもそも、私はなぜこんなに「音消し」にこだわっ
ているのか。先に書いた通り、高校生の頃に感じた
疑問が今も消えていないばかりか、妙にギスギスし
た今の社会の雰囲気と「音消し」の習慣が、どこか
でリンクしているように思えてならないからだ。

例えば、最近よく耳にする「学校でトイレに行け
ない子どもが増えている」という話。小林製菓が
2010年から実施している「小学生のトイレ実態
調査」によれば、小学生が学校のトイレで「大」を
することに抵抗を感じる理由として、ずっと上位を
占めているのが「恥ずかしい」「落着かない」「か
らかわれそう」といった心理的なものだ。「和式が
苦手」「汚い」「休み時間が短い」といった環境面の
理由は、それらの次に来る。

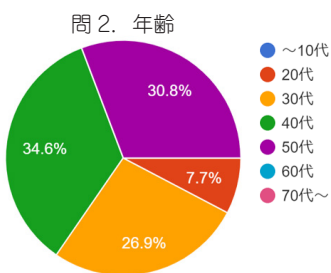
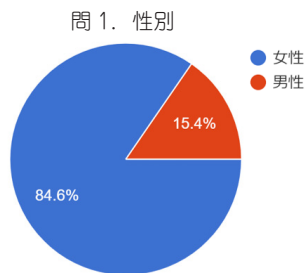
擬音装置が当たり前に設置されている環境が、い
わば「すり込み」のように、子どもたちに排泄を「恥
ずかしい」ものと感じさせていると言ったら、言い
過ぎだろうか。そして、その環境を彼らに与え、自
らも享受することによって、無言のうちにそれを肯
定しているのは、他ならぬ私たちである。

とりあえず、なんとなく

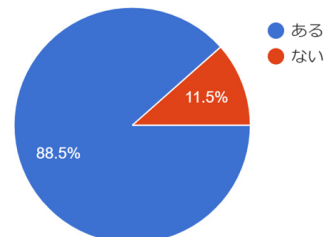
もう一つ、これは「音消し」に限ったことではな
いが、今の社会を支配している「文句を言われたら
嫌だから、とりあえず蓋をしておく」「みんなやっ
てるから、なんとなくやる」という文化への違和感
もある。蓋をした時点で「恥ずべきこと」「やまし
いこと」の烙印を押したも同然だが、そもそも排泄
音は本当に恥ずべきものなのか。それを隠そうとす

トイレでの「音消し」に関するアンケート結果

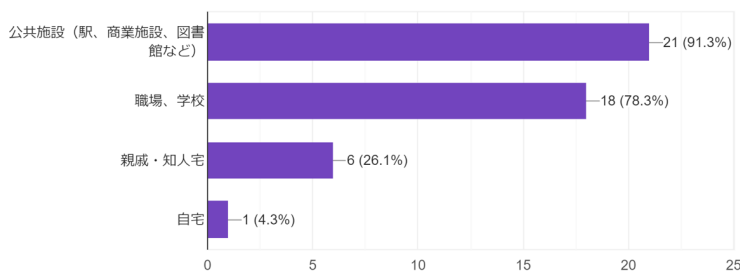
実施期間：2019年7月14日～9月10日 回答総数：26



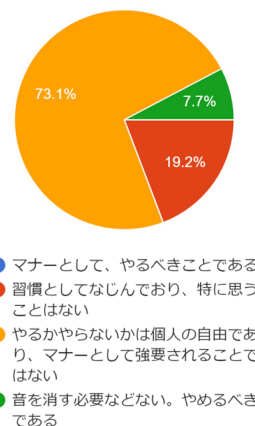
問3. トイレで「音消し」をしたことがありますか。



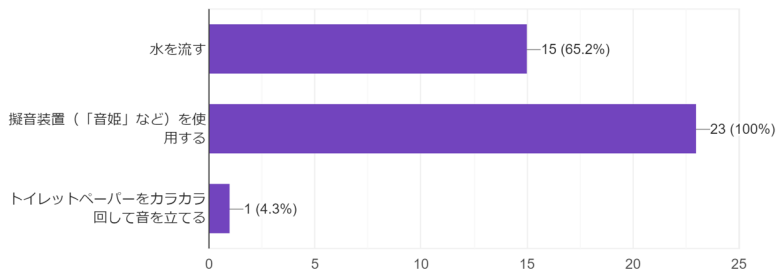
問4. 問3で「ある」と答えた方は、その場所を選択してください。（複数回答可）



問6. 「音消し」について、あなたの考えに最も近いものを選択してください。



問5. 問3で「ある」と答えた方は、その方法を選択してください。（複数回答可）



静かなトイレの中で、そんなことを考えている。

私一人で「運動」している限り、何かが大きく変わることはないだろう。けれども、私と同じように「音消し」に疑問や違和感を持っている人たちが、この「運動」に加わったら。そしてそれが大きな「うねり」となって、5年後、10年後の「音消し」事情に、もっと言えば社会全体に、何かの変化を生み出すとしたら。

そこで、数か月前から地味に「音消ししない運動」を始めている。擬音装置があってもなくても、どうしても気になる場合を除いては、音消しをしない。それだけだ。

「やるかやらないかは個人の自由であり、マナーとして強要されることはない」を選ぶ。ただ「やめるべき」と言いたい気持ちも若干あり、それらをひっくるめてフリーワードでまとめると「『やらない』という選択肢がもっと認知され、選ばれてほしい」といったところだ。それはトイレの問題に留まらず、社会の風通しをよくすることにもつながる気がする。

最後に — 地味すぎる試み

上記アンケートの問6に私自身が答えるならば「やるかやらないかは個人の自由であり、マナーとして強要されることはない」を選ぶ。ただ「やめるべき」と言いたい気持ちも若干あり、それらをひっくるめてフリーワードでまとめると「『やらない』という選択肢がもっと認知され、選ばれてほしい」といったところだ。それはトイレの問題に留まらず、社会の風通しをよくすることにもつながる気がする。

ひとモジのモノガタリ



編集後記

日本のトイレの清潔さや機能の高さについては、その特殊性がしばしば指摘されます。しかし、それ以前に「紙を流せる」とこと自体が世界的には少数派なのだというのを、いくつかの文献にあたる中で知りました。

紙を流せるようにするには、トイレ自体の機能や下水処理設備に加え、「水に溶けやすい紙」を作る技術も必要であり、日本のようにそれらが揃っている国は、決して多くはないのだそうです。

トイレの紙のことなど、あまり考えたことがありませんでしたが、そういう背景を知ると、とたんに見え方が変わってきます。これからはもっとありがたみを感じつつ、大事に使おうと思います。ちゃんと点線のところで切ろうと思っています。

というわけで、欄外も含めて全体的にトイレの話ばかりになってしまった06号でした。お食事中の方すみませんでしたが（いないと思いますが）。

またお会いしましょう。

藤田 一樹